

中国 国

中国はわが心の古里

岩手県 中村 祐太郎

わが部隊はハルピン駐屯鉄道第三連隊、四個大隊と装甲列車隊からなりその中第二大隊は満州里に駐屯していた。兵舎は煉瓦造りで壁の厚さは五十七センチもある。ろくか、各班に大型ベチカがあり石炭を燃し極寒期でも兵舎内は上衣なしでいられる暖かさであった。

ドイツ製といわれる装甲列車には大砲、高射砲、重軽機関銃が装備され、ある将校はこの一両で歩兵一個旅団の威力があると豪語していた。さていよいよ我々の一期の訓練が始まった。鉄道の敷設、撤収修理、架

橋、列車運転、それに戦闘等、三月の北滿には未だ雪があつたが四月になると風に煽られた土砂は竜巻となつて天に押し渦を巻きながら移動する光景は壯觀であつた。訓練が終つて中隊へ帰る我々はお互いに面をかぶつたような顔を見合つて笑い合つたものだ。古參兵は北支事変に出勤した強者共で鼻息が荒く、我々初年兵は時々ハッパを掛けられ縮み上ることがあつた。ある時は班長に引率されて中国人町を見て回り、ある時は武装して喇叭手を先頭にロシア街を行軍し、或いはどしゃ降りの雨の夜道を行軍し、或いはかがり火を焚いて夜の鉄道敷設作業をする等、忘れ難い思い出を残して一期の検閲は無事に終つた。

我々には特業教育というものがあつた。鉄道隊の任務を果すためにそれぞれ専門の特技を学ぶ、それが二

期の訓練であり、私は蒸気機関車の運転の機関員教育を受けることになった。各大隊三十人、私は一大隊の

班長、兵と共に南満の瓦房店機関区に派遣されることになった。七月初めの南満は百花撩乱まるで南国を訪れたような気分であった。駅には機関区の幹部、町の有力者、国防婦人会の人達が出迎えてくれた。我々はアカシヤの木に囲まれた石造りの兵舎の畳の上に横になって久しぶりに手足を伸ばした。いよいよ教育が始まった。機関車の構造は機関区の助役、運転規則は機関士、投炭は機関助手、我々三十人は石垣上等兵の引率で機関区の講堂で授業を受けた、講義は難しく講堂は暑くつい眠くなる。するといつの間にか忍び寄った班長が剣の峰でコツンと頭を叩く、びっくり目醒めて頭を洗って本にかじりつく、こんな授業を繰り返す毎日となった。助役は野球が好きだった。我々の班から一チームを作り野球の練習が始まった。

私は三塁手の二番打者となった。子供の頃に野球をしたこともないのにどうも調子が良い。

秋の大会では好調子で我がチームが優勝しカップと

賞金を授与され班長は大いによるこび記念写真を撮った。

班長は銃剣術が得意だった。独立守備隊から借りた防具をつけて兵舎の前の広場でエイヤツと戦っていると、近所の人達が子供を連れて見に来る、班長は益々得意になってあばれ馬のようにはね回る、近所の奥さんはやんやと拍手をする。班長はいかにも嬉しそうであった。班長は林長次郎の顔を四角にしたような美男子であった。寮の食堂の主人の妹と相愛の仲であったとか、時々密会を楽しんでいるとかの噂であった。

さてその頃東部国境張鼓峰で、日ソ両軍が衝突し激戦を交えていたようである。貸車で輸送される日本軍はその戦線へ行くかのようにであった。ソ軍戦闘機を日本軍は小銃で撃墜したと聞く、その後我々は小銃で対飛行機射撃訓練を行なうようになった。

我々は投炭、点検、給油、の指導を受けいよいよ業務となった。貨物列車専門の機関区で受け持ちは大石橋と大連間であった。大石橋と瓦房店の中間に万家嶺という急勾配があり長大貨物列車は後部補助機関車の

後押しを必要としていた。十一月になって部隊長の検閲が行なわれた。本線の運転は私が選ばれて機関士となり遊岳城から万家嶺までを乗務し極めて光栄であった。運転競技、技量審査等すべての課程を終え原隊へ帰ることになった。おもえば激しい苦楽の六か月であった。あの大型機関を操縦し長大列車を運転した誇り、慰安旅行の時、旅順要塞を見学し日露戦争を省りみた幾多の思い出を胸に秘め、再び厳寒のハルピン原隊へ帰ることになった。

ハルピンは衛兵勤務が待っていた。衛兵は二十四時間勤務で夜間二十分の仮眠を三回与えられる。平時における最も辛い勤務であった。定刻衛門を閉めれば道哨となる。犬の遠吠えを聞きながら、暗闇の小道の一人歩きは不気味であった。入隊後初の新年を迎えた。全軍営庭へ整列し部隊長指揮の下、軍刀一閃捧げ銃の礼を行い喇叭はすめらみくにを吹奏す。

あ、自分も何とか一人前の兵隊になって前線に立っているという実感が湧いてきた。

一月のある衛兵勤務の時の夜、零下四十度になった

時は骨をも凍るかと思われた。吐く息は眞白だがそれが眉毛、鼻毛、防寒帽の毛に凍りついてサンタのおじいさんのようになった。一月の末に北安の機関区に派遣されることになった。班長以下十三人は厳寒期における機関車運転訓練であった。ハルピンは寒かったがそれどころではない。朝日の昇る頃、空気中の水分が凍るのであろう。銀粉を撒いたようにキラキラと輝いて降りてくる。銃も剣も白くなり錆るのが心配であった。国境近くは起伏が多く白樺の林が続き、ノロが群をなし草を求めて歩いている。汽笛を鳴らすと驚いて走って行く、ソ連が近いという緊張の中の素晴らしい風景であった。ある満鉄社員は夏になればこの辺は一面美しい野の花に覆われじゅうたんを敷きつめたようですよと言った。私達は乗務員の泊る宿舎に住んでいた。その部屋は両側は八センチほど高い床で下はオンドル造りで廊下で焚いた煙が床下を通り外の煙突へ出るようになっていた。

零下何十度かの寒い時でも二、三枚の毛布で休めるように造つてあるのだが、床に面した体は熱く上は寒

くぐつすりとは眠れなかった。

ある時、私は何となくふらりと班長に無断で外へ出た。そこへ武装した将校が兵数人を連れて巡察しているのに出合った。この一隊は駐屯地を警戒巡視中の途中で、脱走兵を捜索中であつた。隊長の准尉は「夕刻貴様の班長に会いに来る。班長に伝えておけ」と言つて去つて行つた。日の暮れかかる頃、准尉はオートバイを飛ばしてやつて来て班長に会つて暫くして私を呼んだ。「班長に聞けば中村は優秀な上等兵だそうだが。しかし軍規を犯すことは許されない。我々は二二六事件の麻布の連隊から来た部隊だが現下戦争中問題を起せば大変なことになる今日、我々は脱走兵を捜索中であつた。国のためにも君のためにも気を付け給え」と言つて闇の中へ消えて行つた。

三月になつて我々はハルピンの原隊へ帰つてきた。もう初年兵が入隊し一期の教育が始つていた。私は初年兵教育助手になつていた。班長は衛兵勤務や週番勤務に就くことがありその時は私が班長代理を勤めることになつた。

教官齊藤中尉は立派な上官であつた。兵を愛し励ましいつも隊の先頭に立つて行動する軍人であつた。一期の検閲が済んで、又特業教育が始まり再び機関員教育隊を編成し南満へ行くことになつた。隊長は初年兵教官齊藤中尉である。齊藤中尉は野戦工兵出身と誰かが言つたが上官が立派であれば兵はみな軍務に励むのが定石なのである。私は助手として派遣されることになつた。兵を引率して機関区へ行き、昨年の復習が出来るものと思つていたのに本部の事務、しかも酒保品係りにされてしまった。本部は蘇家屯に在り各分遣隊の元締めであつた。今年も又野球が始まつた。

教官は口の悪い山本准尉で「何をさもさしているこの馬車馬共、引っぱれば引っぱれ」と怒鳴り散らして雑役兵に石のローラーを引かせ球場造りをさせていた。初年兵が機関区の学科が終つて帰つてくれば野球となる。ある時橋頭へ派遣された分遣隊へ交流試合に行つた。

橋頭は安奉線の山又山の、山紫水明の町であつた。時は眞夏で清流にたわまれる子供達を見て内地を思い出

した。試合が終わってそのグラウンドで昼食となり楽しい日曜日のひとときを過した。その頃西部国境、ノモンハンでは日ソ兩軍は激戦を交じていた。日本軍は火焰瓶で敵戦車に立ち向かっているという。まるで象に犬が吠えているようではないか。眞夏の焼けつくような日照りのある日、突如非常呼集が発せられた。我々は何事ならんと営庭に整列した。隊長は「只今原隊より電報が届いた。破格の光栄に浴す、全員直ちに帰隊せよ」と書いてある。「諸兵は直ぐに準備せよ」さあ大変だ教育どころではない。いよいよ出発の時がきた。焼けつくような陽を浴びて荷造りだ運搬だ、午後三時頃蘇家屯の駅に滑り込んだ。列車に大連、瓦房店方面から乗り込んだ分遣隊の兵が乗っている。それに合流してハルピンに向かった。ハルピン駅から原隊まで行軍となった。

焼けつくような陽を浴びて黙々と歩く、苦しくて苦しんで死んだ方がまだとさえ思った。奉天で見た戦利品というソ連軍の戦車を思い出した。我々は歩兵ではないがあんな戦車が近づいて来れば火焰瓶以外にう

つ手はないだろう。へとへとになって原隊に着いた。既に出動態勢は整っていた。今どきのこのこ帰つて来やがつてという不満の声が耳に入る。

原隊の彼等はどうなにか苦勞したことが、それから何日かして停戦協定が結ばれたという。

情報は常に日本軍善戦と伝えていたが一個師団全滅との噂も聞こえる。関東軍指令官の消息は少しもない。それから間もなく我々は再び南滿に向かい分遣隊は各々の地へ向かつて行つた。隊長齊藤中尉は西部国境滿州里へ。

替つて佐藤中尉が隊長となつて着任した。

日ソ停戦後は平穩の裡に時を過し十二月になつてハルピンへ帰ることになった。そして再び衛兵勤務等に就いている中に新京の西の白城へ派遣されることになった。各中隊から数人教官に助教助手の計三十人、我々の乗つた列車は銀一色の北滿平野を南下、四平から西へ向かい西部の要塞白城へ着いた。そしてごみだらけの倉庫を掃除した歩兵部隊から借りた寝台を並べ壁の隙間を目張りして宿舎を作つた。

教育担当はヒットラーひげの機関区助役富山氏であった。毎日朝点呼の時、質問を浴びせられ勉強は眞剣に行なわれた。私は時々添乗を命ぜられ初年兵の乗務する機関車に乗り込んだ。ある日須沢とハロンアルシヤンへ行くことになった。途中王爺廟の丘の上の白い石造りの喇嘛廟がおとぎの国のお城のように見える。更に西へ行くと枯草の中からキジが飛び出すその数無数、何を食べているのやらぞろぞろ群をなして枯草の中へ入っていく。中国人の機関士が時には羊や牛が線路を歩いていて列車にひかれることがありますよと言った。

更に西へ行くと興安嶺の密林地帯にさしか、った。どこへ送られるのか巨木が貨車に積まれ発車を待っている。興安嶺を越え夜になって阿爾山へ着いた。途中の駅にも電灯はなかったが、阿爾山にも電灯はなく雪道を歩いて温泉を探した。輝く星の明りで雪路を歩く小屋のような住居の窓から日本語の話し声が聞こえる。あの人は軍か鉄道関係の人達であろう。星空の下にかすかに稜線が見える。その陰が外蒙古であり、この

西の方に昨夏日ソが血を流したノモンハンがあるはずだ。

二人は温泉を探しあてた。ランプの灯る地下室のような湯にひたってゆつくり手足を伸ばした。人の話では冬でも蛇が冬眠せずこの湯に温まりに来るといいうのを聞いたことがあった。ほのぼのとした暖かい湯であった。

それから客車車両へ横になって夜を過した。

列車は薄暗い頃発車した。途中沿線に日の丸の飛行機の残骸を見る。昨夏ノモンハンで戦った墜落機なのであるうか、しきりに心は痛む。白城に日本人小学校があり、その校庭にスケートリンクが造られていた。雪を踏み固め散水し回を重ねて平にして立派なリンクを作るのは中国式スケートリンクであった。

教官伊達中尉殿は大連に住んでいてスケートを楽しんでいたようで白城へスケートを持って来ていた。私はそれを拝借して滑ってみた。

私はかつてスケートをしたことがなかったので、おっかなびっくりであったが、おやおや滑れるではない

か、満州の僻地へ来てスケートをするとは一大発見であった。何度も何度も滑ってみた。命を捧げる覚悟で一兵として満州へ来て野球をする。スケートをする。あちこち見物をする。それに機関車を運転する。

省りみれば私にとって軍隊とは学校のようなものであった。ある日、私は富田と共に喇嘛廟見学に出掛けた。前日は私と富田が留守に残り教官以下全員廟へ出掛け、今日は交替して私達が行くことになった。葛根廟で下車しかつて車中から遠望した丘の上の白い石造り建物を目指した。廟の入口で四十歳ぐらいの赤黄の法衣をまとった僧に案内され本堂に入った。本堂は広く高く薄暗く不気味であった。径五十センチもあるうかと思われる柱がずらりと並び、その間に数十人の僧が座し長い經典を手送りしながら讀経している。時おり四メートルほどの長い喇叭を吹き、鐘を叩き騒然となり地獄へでも落されたかのような気持ちであった。案内僧は本堂の裏の佛像庫を案内した。私は昨日の見学者達から懐中電灯を持って行くように言われていたので準備はしていた。窓の少ない薄暗い庫裡で腰

に布を巻いた佛像のその布を上げてのぞいて見て驚いた。懐中電灯に照らされたものは奇々怪々人姦獣姦の像であった。

それが何十体となく並んでいる。喇嘛教とは一体何を教えている宗教なのであろうか誰に聞くことも出来ず逃げるように外へ出た。

起伏する無限の草原を数十頭の羊が草をはみながら動いていく、丘に現われ谷に消え動くじゅうたんのようであった。三月になって我々は任務を終え原隊へ帰って来た。私は三年兵になり兵長になった。衛兵、週番、初年兵係と多忙な日々を過し夏になって突如腸チフス患者が続出した。原因を探究しても説明せず作業訓練を中止してしまった。部隊長はこの部隊最大の不祥事であると痛嘆した。ある時は屍衛兵となり、ある時は陸軍病院の守衛となり、しかし三十四人が尊い生命を無にしてしまった。

九月に私は伍長となり週番、衛兵等の勤務が専門のようになつた。九月のある日週番を勤めている時部隊は秋期演習で最新鋭の鉄道敷設車の使用訓練中、富田

上等兵はレールに股をはさまれ切断して即死してしまつた。翌年三月頃除隊だろうと予測していたのに一月になつて急に除隊を告げられた。思えばあつという間の三年間であつた。入隊しない人達に比べれば三年間人生の無駄をしたような気がする。現地で就職の道はある。しかし北満はあまりにも寒く一生をこの北満で過す気にはなれないし、佳木斯の菊田さんはお世話しますからぜひ満鉄へ就職しなさいと手紙をよこしてくれたが、急な除隊の通告に戸惑いながら故郷へ帰ることになった。車窓に映る巨大な燃ゆる太陽を眺めながら南端の港、大連へ向かつていった。

私は天津機務段に就職し早速乗務することになった。機関車乗務は三人だが二人は日本語を知らず、私は中国語を知らず、果して危険を伴うこの仕事が出来るかなと思つたが二人の中国人は親切に教えてくれた。

夜行の貨物列車に乗務して初めて豊台へ行った。どこへ泊れば良いかも知らず中国人の後について彼等の泊る仮眠所へ入つた。薄暗いその部屋に夜勤の人達が二十人ほど横になつていた。私も彼等の脇に横になつ

てうとうとすると体中がかゆくなつてきた。南京虫の総攻撃であつた。あ、一生この南京虫に攻められるのかと思ひ途方に暮れそうであつた。

その頃天津、豊台間は復線工事中であり十八年に自動閉塞式となり華北交通に夜明けが訪れたようであつた。半年ほどして津浦線の旅客列車乗務となつた。機関士は梅田氏、彼は中村君は缶焚きが上手だなとほめてくれた。赤面の至りで返す言葉もなかつた。彼は南満瓦房店から来たそうで乗務中瓦房店の話に花が咲き楽しい乗務となり、私は少しずつ自信が出てきた。南満の機関車は殆ど自動焚火機で入換機関車と小荷物列車の機関車だけが手焚きであつた。私が瓦房店で勉強中は手焚きの経験は殆どなく、天津へ来て全部手焚きなのに驚き苦労したが大体コツを飲み込み楽になりつつあつた。ある時ハルピンの戦友大塩軍曹から手紙がきた。越川大隊長が北京の野鉄司令官となつて赴任したよと書いてある。私は早速司令官に手紙を差し上げて近い中に酒を持って拜顔に参上しますと書いた。すると返事があり南方〇〇へ行くことになつたと知らせ

て下さった。南方とはマレーだろうか、ビルマだろうか。その頃南太平洋戦線は暗雲が垂れ込めているようであった。暫くして大塩軍曹から電話がきた。我が部隊は徳県へ駐留中ということだ。いよいよ出番がきたようだ。太平洋海域においては山本元師が戦死したとか、ラバウルを撤退したとか。その戦線への艦船の補給は見込みがないようだ。陸路シンガポールへの輸送に鉄道を活用するとすれば鉄道隊が北支、中支、南支、ベトナム、マレーを継ぐ鉄道を完成せねばならない。これを釜山と結べば朝鮮、満州を経た大東亜鉄道となる。それは大本営の夢かも知れない。

私は準職員試験に合格し、北京の铁路学院機関車科に学び機関士試験に合格し職員となった。除隊即満鉄に入社すればこれより三年も早く職員になれたのに無駄な歳月を過したような気がする。

天津の中央を流れる河を白河という。冬でも凍ることのない河をなぜ白河と呼ぶのか中国人に聞いても成程という返事はなかった。

この河の水は早朝から夕方まで、下に流れ、夕方が

ら明け方まで、上に流れる。天津から河口の塘沽まで五十キロだが落差は一メートルなので潮の干満により天津までも水は逆流してくるのである。船上生活は網を下しておけば水の流れと共に船は下流へ、或いは上流へ流され網を揚げるだけで魚が取れるようであった。天津には日、佛、莫、伊の租界があり、それぞれ本国の文化の香りを漂わせている感触を受けた。

昭和十九年頃から太平洋海域の日本軍は、連戦連敗軍艦マーチを聞くことはなくなり米艦載機は中国南部より次第に北上し機関車を銃撃するようになった。二十年の三月米軍機の東京上空襲を知り危機感に被われている頃、時には機関区内で、或いは唐山方面で脱線事故がしばしばあった。六月北京、天津両機関区から十三人が華北南部地区の輸送救援と、機関車修理に派遣されることになり、私もその一人となった。八路軍の攻撃で危険を感じる中国人従業員は欠勤するようになり手不足となったのである。我々の乗った列車が新郷に近づいた頃、空襲警報が発せられ機関車は防空壁の間にかくれたが、左右壁の間に屋根はなく猛鳥のよ

うに急降下する米機の銃撃を浴びて機関車は蒸気を吹き上げお陀仏となった。我々は列車から飛び下り群衆と共に蜘蛛の子を散らしたように逃げ、くさむらに伏せた。草をはんでいたバツタが一斉に飛び上り飛んでゆく、空が暗くなるようであった。

米機は反転銃撃を繰り返して南の空へ消えて行った。列車は救援機関車に引きずられて新郷へ着いた。驚いたことに鉄道関係の建物はなくレールだけが並んでいる。牛が丸々とふくれた牛を引きずって並んで行く。

被爆火災の時、車の中でむし焼きにされたのであろう。その牛が放置中、腹にガスが充滿したもののようだ。

夜になって空襲警報のサイレンが鳴り出した。我々は寝姿のまま飛び出し避難したが、さいわい銃爆撃はなかった。夜が明けても不安は消えず輸送や修理どころではない。交渉の結果無被爆地の商匠は小さな静かな町であった。我々はここに腰を下して一か月間、出勤することになった。昼は銃撃の目標となるので、夜間運転となった。ある出勤点呼の時、地下運転室で「中村さん」と声をかけられびっくりした。彼は運転室勤

務の鉄道兵であった。「長辛店の鉄道隊の機関員で天津で機関車乗務訓練の時指導して頂いた者です」と言った。

彼は富山機関区から入隊した兵隊であった。私が二年兵の時、機関員教育本部勤務をしていた時の班長、地崎伍長も富山機関区から入隊した人であった。天津で乗務中、彼と地崎さんのことなど話し合った楽しい思い出が、激戦地のこの地下で行なわれようとは全く意外のことであった。

夜の乗務は不気味であった。暗闇を前照灯なしで走る手さぐり運転とでもいうか、目かくしをして走るにも似て不安極まらない。米軍に、こゝまで追い詰められて果して勝算はあるのだろうか。とにかく夜の明けぬ中に目的の駅まで走らねばならない。二人の二十歳前後の日本人助手も不安と疲れで元気がないように見える。夜のほのぼのと明ける頃、ようやく終点開封へ着いた。何度かこんな乗務を続けている中、一か月は過ぎてしまった。我々は徐州斉南を経由して久しぶりに天津へ帰ってきた。しかし街の様子と中国人の態度が

おかしいようだ。物不足だった街に青空商店が並んでいる。商品は雑貨に食べ物、そして活気があるようだ。中国人の日本人に対する目つきが敵しいように見える。私達日本人は南方海域の戦況が不利なことはいうす感じてはいるが、中国人の中には短波放送を傍受し日本の敗戦の近いことを察知しているようだ。天津上空に米重爆機 B 29 が現われた時は、背に冷水を浴びる思いをした。米軍の沖繩上陸、広島、長崎への原爆投下、ソ連軍の満州進攻と悲報相次ぎ意気消沈の頃、天津北站前で伊達中尉にばったり会った。中尉は在隊中古兵の教官や我々機関員が白城へ派遣された時の教官でもあった。

除隊して大連へ着いた時、ようと声をかけ作業服を着たまま我々の車両へ入って来て一緒に夜の夜の大連を散歩した人なつこい上官であった。日本のまさに危急存亡の時こんなところでお目にかかるうとは、中尉殿は多くを語らず、「しんが疲れたよ」と急いで駅の方へ走って行った。列車に乗るのやら駅の北の天津駐屯車へ行くのやら不吉な出会いのような気がする。

八月十五日は焼けるような日照りの日であった。玉音放送というので何事ならんと耳を傾けていたが敗戦であることを知り腰が抜ける思いであった。八月末に中央軍が進駐し隊伍を組んで行進し意気軒昂、九月になって米軍が進駐し日本軍は武装を解除された。

米軍の入城式には砲を下向けにした重戦車が音もなく堂々と行進する。北寧公園の北側の日本軍兵舎から出て来たようだ。米軍戦闘機は乱舞し、中国人は波のように押し寄せて、「万歳」を叫ぶ、天地がひっくり返ったようだ。私は群衆の隙間から息を殺して見詰める。

かつての無敵皇軍の姿はない。八路军が郊外に迫っているという噂はある。夜になると散発的な銃声が聞こえるようになった。

その頃満州では国境全線からソ連軍がなだれ込み満人と共に掠奪、暴行をほしきままにしているとか悲報相次ぎ騒然、日本租界では日本人が中国人に暴行を加えられているとか、その頃私は給料を貰いに機務段へ行った。

一緒に内勤だった張さんが「駄目駄目すぐ帰りなさい。今日は危いですよ」と言った。私は急いで向きをかえ帰ろうとすると、数人の中国人が私を包囲した。後ろから張さんが大きな声で叫んでいる。「中村さんをなぐるな」と叫んでいるようであった。私は何もないうような素振りでも電車通りに出た。数人の若者達は何処までも尾行して来て私が電車へ乗るのを見て帰って行った。電車はフランス租界日本租界を通って河北方面に走る。あちこちに日本人が倒れているようだ。その周辺に米兵が立っているようだ。米兵は暴行を受けた日本人を助けているように見えた。家へ帰ったとき家内に、「顔色が悪いですよ」と言われた。私にとつてあの日は恐怖の日であった。九月半ばになつて装甲列車運転を命ぜられた。塘沽、唐山間に八路军が出没して中央軍の満州行き列車を妨害するのに対処するためのものであった。装甲列車といつても機関車の前後に休憩用屋根車、その前後に土のうを積み機関銃、小銃で武装した日本軍、一個小隊程度の急造の装甲列車であつた。武装を解除された日本軍を米軍が命令し

て乗り込ませたのであろう。

隊長は東京の人で五十五歳くらいの老少尉であつた。「終戦になつて日本へ帰れるかと思つていたのに、これからどうなるものやら」と不安の様子であつた。その辺は二年ほど前から八路军の出没する地帯で車両の脱線することが時々あつた。あの頃私は運転室で内勤準備員をしていたが脱線の通報を受ければ救援起重機車を派遣せねばならず、しかもそれは夜でありホトホト困つたものであつた。あるとき清水という機関士が野球に参加させるため、当番から下し中国人機関士を乗務させたが脱線して動けなくなつた。機関車にピストルを持って上つて来た八路军の兵士は日本人と思ひ射撃した事件があつた。清水氏は幸運であり中国人機関士はあまりにも不幸であつた。

そんなことを思い浮かべている中に一か月は過ぎた。国民、共産両軍は対峙していることだが、お互いに発砲することなく平穩というか一触即発というか、私は任務を解かれて天津へ帰つてきた。その頃から各地に散在する日本人は天津へ天津へと集合し、

旧北支軍貨物廠へ収容されるようになった。私は再び機関車へ乗った、天津へ集まった日本人は、ひとまとめにされ貨物廠へ送る。これが私の仕事となった。監督の米兵が機関車へ上ってきて早く走れという。トラックでも走らせるようなつもりでいるらしい。荷物のような人々でも進行信号が出なければ発車は出来ない。それに機関車は疲れてしまって蒸気が上らず、彼のいうような速度は出ない。米兵は私を中国人と思っ
ているようだ。私は米兵の被服や銃を觀察した。被服は温かく、軽いようでポケットが多くあり、缶詰などが入っている。銃は軽く私達が使った三八式騎銃の半分くらいのようにだけれど、連発式のようにだ。我々が使った三八式騎銃とは、明治三十八年、日露戦争の頃、開発された小銃と聞いたような気がする。米兵を鬼畜と言ったものだがそうでもないらしい。

当時在住中国の日本軍民は数百万人とも言われ、これを日本船で帰国させるには数年を要すると言われ生活の問題が重要視され、米国は米艦を使って日本への送還を始めるようになった。私の場合妻と幼女の三人

だが妻は身重で帰るに帰れず帰国を延期せねばならぬ状態であった。私は帰国を断念し残留することになった。私の鉄道技術は全く初歩であり、中国の鉄道に何の貢献も出来ないのだが、中国側は十人ほどの技術者の中に私を入れてくれた。機務段に機関車の点検技術者として残留することになり、日僑の腕章をつけて出勤することになった。ある日、出勤の途中、何年前と一緒に機関車で乗務した中国人老機関士に会った。彼はこう言ってくれた。

私は日本人の助役某に追放されたが、中国は戦争に勝ち華北交通は中国人の手に戻った。「中村さん日本人は日本へ帰っても生活は苦しいはずだ。中国へ残って私達と一緒に働きましょう」と言ってくれた。中国へ貨物廠へ収容された日本人は米国の上陸用舟艇で日本へ送られているらしく、天津には日本人の人影は殆ど見られなかった。十二月の末、河北大馬路を歩いていると後の方から「中村さん」と呼ぶ声がする。誰かなと思いつつ歩き続ける。又「中村さん」と呼ぶ。振り返ってみると十字路の中央の交通整理の台の上のお巡りさ

んが手を上げて私を呼んでいる。戻って近づくと、何年か前に、一緒に乗務した機関助手の刘さんだった。

彼は「機務段を追われお巡りさんになりました。困ったことがあるなら言ってお手伝いしますよ」と言った。その頃残留者達は交通部の住宅へ集合しつづあつたが、私は身重の妻と幼女を抱え途方に暮れていた。そこで妻と相談し彼へ引越しを頼むことになった。

ある日、刘さんは馬車を連れてきて荷物を載せ自分はその荷物へまたがり、銃を持って安全運搬をした。これを地獄に仏というのだろうか、ある日彼はひょっこり訪ねて来て中村さんお願いがありますと言った。「私には妻が二人います。一人は親が決めた妻、一人は恋愛で私が決めた妻、どちらにも子供がいますが、妻同士は喧嘩をします。片方の妻と子をこの部屋へ住まわせて下さい」

私は困ってしまったが、「この家は交通部、(鉄道省)の住宅で現職の家族以外住むことは出来ないのです」と論じて断った。一月初め妻は男子を分娩したが、赤

坊は大きな声で「オギャア」と泣いて間もなく息を引き取った。敗戦前後の苦勞のせいであろうか、私は小箱に収め裏の土を深く掘り埋葬した。妻は身をふるわして泣いた。隣の奥さんがよく面倒をみてくれた。

隣の主人は日本の大学を出た立派な人で、工務段の段長で中国語も英語も出来る人だった。やくざのような中国人が来て物品を要求しても、米兵が来て娘を要求しても体よく断ることの出来る紳士であった。ある時一緒に運転室で勤務した張さんが訪ねて来た。張さんは元満鉄社員で大連機関区に勤め天津機関区に転属した人であった。彼は機関士、私が助手で山海関、天津間を一緒に乗務したことのある間柄であった。「何か困ったことがあるなら言ってお手伝いしますよ」と言ってくれた。私は中国へ来て地獄の道を歩くような苦しいこともあったが何人かの仏のような人にも会った。いつかこの恩返しは出来るだろうか。私は先輩検査員の指導を受けながら機関車検査をした。天津機務段の機関車は殆ど日本製で、英国製のタンク式機関車は入換用にマレーの戦利品として持って

きたというマテイ型機関車は満鉄では急行貨物用に使っていたが、天津機務段では急行旅客用にしようとして整備試運転をしたが駄目なようであった。

私達が機関車を検査中、米国の技士が来て機関車の構造を調べているのに驚いた。

米国は中国復興のために軍事、政治、経済にも技術的指導を行うのであろうか、日本のように侵略一辺倒とは大分趣が違ふようだ。

ある時装甲列車が洗缶のため入庫して来た。

将校は中国人で兵は日本人であった。日中の終戦と同時に国共戦が始まったのだが、これは国民軍に参加協力する日本兵かも知れない。山西省では終戦時多くの日本兵が軍閥、エンシヤク山軍に参加し、中共軍と戦っていると聞くが本当なのであろうか。共産党の野坂参三が延安で万歳を叫んでいると聞くが本当であろうか。世の移り変わりの激しさにうろろうするばかりであった。終戦当時がたがたの機関車も日本人が去り中国人が復職し整備も運転も安定するにつれ、私のような未熟者は不要になってきた。残留者の中未熟者

三人と庶務一人が留備を解かれ、六月に帰国することになった。その頃天津には日本人らしき人影は殆ど見えなくなった。米国の艦船による引揚業務のせいであろう。

しかし敗戦の祖国はどうなっているのであろうか、日本から天津へ到着した強制労働の中国人は、日本軍の服を着て長靴をはいていた。彼は私にこう言った。

「貴男は日本人ですか。日本には食べる物がなく家は焼け、住むところはなく路頭に迷っています。

日本へ帰らず中国で暮しなさい」と心温まる話であるが私は帰るのだ。焦土の祖国へ帰って復興せねばならない。荷物をまとめて数家族と共にトラックで貨物廠へ向かった。ところがいつの間にか戦争犯罪人に指名されていた。行を共にした三家族は三日目に出帆。私はその頃米軍と中国軍の取り調べを受けることになった。例え捏造であっても取調官が犯人と決めれば犯人になるのが中国の例だと聞く。さて取り調べが始まった。私は清清と答えた取り調べが終わると取調官は無罪と宣告した。私は同僚より数日おかれて米国の上陸

用舟艇に乗った。日本の兵隊さんが荷をかついでくれた。帰国者は持てるだけ荷物を持ってよいと言ってくれた。初めて黄海へ出る。黄海は渤海へ注ぐ金溪河、白河、黄濁の水を飲み黄海へ吐き出すので、その名の如く黄色であった。渤海でも山海関、北戴河附近は水がきれいで海水浴場になっていた。それは蘭河の清流が注ぐためであろう。黄海の航海は極めて平穩であった。黄海のさざ波に巨大な洛陽の光が注ぎ金片をバラ撒いたようだ。中国よ、さようなら、中国の友人達よさようなら。

昭和五十四年の秋、日中平和条約締結記念。

日中友好の船旅行の募集があった。

私は早速申込み中国船、耀华号に乗って博多を出航した。三十三年振りに心の古里中国へ行く、テレビで一年ほど学んだ中国語はどれほど役に立つものか、胸はわくわくする。

しかもコースは天津、北京、大連、瀋陽、みな懐かしの古里であった。

台風は鹿児島へ上陸しようとしているのに、黄海は

一片の波もなく鏡の上を滑るような航海であった。中国は、ノミ、シラミ、蠅がいないと言う。それに泥棒もないとは本当だろうか。忘れ物はいつも必ず戻って来るとは毛沢東思想の成果なのだろうか。そろそろ海の水は黄色になってきますよと回りの人達に話しておいたのに、いつまでも青くその中に、渤海へ入り塘沽の岸壁へ横付けになった。

元々塘沽は遠浅の海で満潮を利用して塩田へ水を引き天日で蒸発させ原塩を採る方法のはずなのに塩田は見えず護岸され、巨大な土工機械がずらり並んでいる。数十世帯が生活出来るような大アパートが数棟並び、どこにも塩田の姿はない。

広い舗装道路が西へ向かって延びていた。

沿道の人々は小旗を振って歓迎の意を示してくれた。軍糧城の前へ差しかけた時、「皆さんあれが昔日本軍の補給基地で、あれを基盤として日本軍は中国を侵略したのです。」と説明した。そしてつけ加えた。

「しかし皆さんはあれと関係はありません、皆さんは中日友好のために来たのですから。」と胸を抉ぐる言

葉であったが、それは眞実の言葉でもあった。天津東
站、万国橋、駅前の建物等昔のままであった。白河の
水は青かった。

何度見直しても青い。渤海の水が青かったのはこの
河の水が青かったせいだろう。

中国に「河を制する者は国を制す」という諺がある
と聞いたが毛沢東は、この河を制し水をきれいにした
のだろうか。

フランス公園にテント張りのような小屋が密集し人
が住んでいるようだ。数年前の唐山大地震がこの辺ま
でもゆるがしたのだろうか。

私達は天津賓館へ着き旅装を解き早速外へ出た。自
動車が走ってもいないのに、四車線に歩道付という豪
華な道路がある。買物をしようとしても店はなく、人
通りも殆どない。眠れる街といった感じであった。

元のフランス租界を通った。あの頃フランス映画を
上映していた「光明」はそのままだが映画を上映して
いる気配はない。

あの頃天津に住む最高の楽しみはこの映画館でフラ

ンス映画を見ることだったが、今は映画館でないよう
だ。

元日本租界へ行って中原公司へ入った。

建物は昔のままだが薄暗くて足元が危ないようだ。
商品は少ないが客は押すな押すな状態で日本の戦後
復興時代に似ている。

私は布靴と毛沢東帽を買った。それから幼稚園と、
絨緞工場を見学して周総理の母校前を通り南へ走り広
大な人造公園へ着いた。

昔この辺は大湿地帯でクリークがあり巾の広いクリ
ークは徐州まで続いていたそうだ。

中国は土を掘って池となし、土を盛って山となし名
を水上公園と称し、畔には友好都市神戸から贈られた
桜が植えてあった。通訳は春には花が咲きましたと言
った。広々とした自然動物園にはパンダが五頭楽しそ
うに遊んでいた。翌朝は早起きして北京に向かった。

天津駅で車両の回送を待っている頃夜が明けた。目
の前の貨物列車が動かず、昔私の勤めていた機務段は
見えない。通訳は機務段は南へ大きく建替えましたよ

と言った。そしてあの給水塔のところですと指さした。残念、塔は見えても建物は見えない。ちよつとひと走りして見えるところまで行こうとすると目の鋭い男に制せられた。その男は旅行団の人の動きを監視しているようだ。客車車両が回送され、それに乗って間もなく発車した。天津北京間の特急のようである。私が乗務していた頃百四十キロのこの区間を二時間で走ったが、これは十五分短縮して北京へ着いた。あの頃は北京城の門のため複線になれず豊台北京間は単線であったが今は北京城を解体し、北京駅まで複線となりすべが便利になっていた。新北京駅は昔北京路学院のあたりに堂々と建て替えられ、大中国の首都に相応しい立体駅になっていた。

万里の長城と十三陵を見学し、北京飯店で夕食をとり、大連へ向かうため北京駅で列車へ乗った時のことである。一人の中年の女性が同行の福島ふくまの老人の首に抱きつき大声で泣き出した。私は班長をしていたが何かなんだか解らず処置のしようもなく同班の人に聞くと「あの女性はあのおじいさんの娘です。終戦の時あ

のおじいさんは奥さんと二人の娘を残して单身帰国し、そこに腰かけている人と結婚したのです。この旅行を機会に三人に会って離縁を告げ、手切金三十万円を持って来たのです」と説明した。「あの娘は妹の方でホームにいる老女は昔の妻で塘沽へ着いた時、岩壁で傘を振っていたのが姉娘で甲板で赤い布を振っていたのがお父さんでした」と説明した。連れて来た後妻は車内の椅子でうつつむいている。

これが残留孤児の実態なのだ。私は溢れる涙を押さえ得ず班員に呼びかけた。「一人十円ずつカンパして下さいあの娘さんに上げましょう」と叫んだ。みんな異議なく素直に出してくれた。私はそれをまとめて娘のポケットにねじ込んだ。発車のベルが鳴ったホームに降りた娘は母の手を払いのけて列車に乗りとうとしたが、駅員に押えられ列車は動き出した。ひと時も忘れ得ぬ夫に父に三十四年振りに会いながら再び生き別れするとは何たる残酷。彼等母娘は蒙古から来たそつだ。我々一行は塘沽から再び船に乗り、大連へ向かい埠頭で夜を明かした。下船直前団長は今晚旅大市共産党委

員会の歓迎夕食会に招待されることになった。中村さんは謝辞を述べて下さい。原稿を二部作り一部を通訳に渡して下さいという。なぜ私にそんな大役を、習ったばかりの中国語で時々中国人と話をしているのを聞いて中国通と思ったのだろうか

ゆっくりしてはいられない、急いで書いて提出した。小雨けむる埠頭では少年少女の民族舞踊が行われ歓迎の意を表してくれた。下船し雨の上った市内を見物し、星ヶ浦海水浴場を眺め元日本人小学校へ行き作品展を見、先生と懇談し意見を交換した。団員の中に三人ほどこの小学校で学んだという人がいた。「学校は昔のままでありませんが、建つてもう五十年にもなるでしょう。廊下に穴があきましたね」と言った。早く修理してくればよいなあと思って別れた。次は招待された曲芸を見に行き、その素晴らしさにかたずを飲む、最後のそうらん節は芸人も、我が団員も大合唱となり場内は割れんばかりの拍手で終幕となった。

続いて近郊の農場の見学に行き、桃園に案内された。九月というのに枝もたわわになっている。秋採り桃と

いのである。農園のおばあさんが五つほど持ってきてどうぞと言う。私は匂いを嗅ごうとすると、おばあさんはあわててためだめ、皮をむいてからと叫んだ。

それから集会所へ行って懇談会質疑応答となった。そこへ蠅が一匹飛んできた。中国には蠅がいらないと言うが、いるにはいる。しかし往時に比べればいないようなものだ。私は農場の肥料のことについて質問した。案内者は次のように説明した。農場より高いところに大学があり、便所があり糞尿は水洗、水と共に中国のタンクで液化し肥料となり畑周辺のパイプでバルブに依り適時適量施肥される。なるほど経済面も衛生面も合理的であろうと感心した。

夜、委員会の招待を受けた。私は幹部のテーブルに招かれた。用意したメモに依って感謝の挨拶をし、通訳が翻訳してくれた。団長は中村さんなるべく中国語で話して下さいよと言われたが、一年そこそこの勉強ではのどまで来ていても口の外へは出てこない。天津に住んでいた時もっと勉強すれば良かったと思うがあの祭りだ。私は毛沢東を称える歌「我愛北京天安

門」を歌うので合唱をお願いしますと言ひ中国語で歌った。中国人は大声で合唱してくれ私の面目は保たれた。酒も料理も充分であつた。出席者は旅行団長と随員、中国側は旅大市革命会委員と通訳、それに我が各班長であつた。酒が充分に回つた頃、某班長がなご節を演じた。本人は良い気分の方であつたが委員長は立つて宴はこれで終りと言つて出て行き、中国側はそれに続いて全員会場を去り廊下へ並んでしまつた。

中国人は酔つぱらひは大嫌いであることをなにわ節先生は知らなかつたらしい。私も急いで外へ出て一昨日天津で買つた毛沢東帽を忘れてきたことを思い出したが宴席へ戻るわけにはいかない。

夜が明けて朝食の頃、中村さん帽子が届きましたよと言つて通訳嬢が届けてくれた。

中国には蠅も蚊も泥棒もいないと聞いて来たが忘れ物まで戻つてきた。蠅と南京虫と泥棒は中国の名物だつたはずなのに、毛沢東の指導に依り一流の良識の国になつたのだろうか、私の班の中国人通訳は「中村さん良かったですね」と言つた。

その翌日は奉天見物であつた。沿線の懐かしい思い出の駅が現われては消えていく。奉天の駅前広場では民族舞踊団の大群舞、それを取り巻く群衆、ああ中国は本当に我々と手を握つてくれるのかと思つた。瀋陽賓館に入つて一休みして見学に出掛けることになつた。私と阿部氏は蘇家屯へ、その他は西の工業地区を見学に行くことになつた。私は二年兵の時の教育隊跡を見たいと思ひ阿部氏は子供の頃住んでいた家と、父の病死した病院を見たいと言つた。二人は通訳が手配してくれたタクシーに乗り南へ走つた。距離約五十五キロ、道路は広くもないがおおむね直線で舗装された並木道、右を見ても左を見ても果てしない緑の大平原、ああ、中国は素晴らしいと思つた。蘇家屯へ着いたが街の様子はすっかり變つて見当はつかない。駅へ行つて「写真を撮つても良いですか」と聞くと一言で駄目と言われた。は、あ、自由の国ではないんだなと思つた。元の兵舎や、日本人小学校も見当らない。右往左往していると六十歳くらいのおじいさんが近寄つてきて日本語であなた達は日本人ですかと言つた。

阿部氏はそうですと云つて事情を話した。

おじいさんは手まねしながら日本語で教えてくれた。彼は昔日本人と共に満鉄で働いていた人かも知れない。阿部氏は元住んだ居家と父が病死した病院を探し当て、当時の風呂屋も解り感無量のようであつた。

彼は終戦時父に死なれ七歳の頃母と弟や妹と共に引揚げて来たそうだ。これで今日の午前の目的を果したが、私は風雲急を告げた在隊中の思い出はよみがえらず、うつろな気持ちで帰ることになった。ホテルへ帰つて運転手へタクシー代を払おうとすると彼はシーシーと言つたようだ。

百四十円を差し出すと再びシーシーと聞える。よくよく聞くとシーシーと言つたようだ。

百十円だったのである。彼はチップをやるうとしても受け取らず、謝々と言つて笑つて帰つて行つた。タクシー運転手は公務員だそうだが立派なものだと感心した。

我々はホテルの大食堂で昼食となつた。その時青森から参加した人が「中村さん西地区へ行つた時ある夫

人が私は日本人です。終戦の時日本へ帰れず朝鮮人に助けられその人と結婚しましたが日本へ帰りたいのです。明けても暮れても日本を忘れることは出来ません。

どうぞ日本へ帰れるようお願いしますと言われました。どうすれば良いでしょうか、そして奉天には未だたくさん日本へ帰りたい日本人がおりますと言つてました。私は青森へ帰つたなら県か、その夫人が三沢出の人ならば三沢の役場へ報告すればいいですと云つておいた。私は引揚者であるが米軍管轄下に在つて満蒙の事情は良く解らなかつた。奉天にまだたくさんおられますという事は只ならぬことだと思つた。奥地避地を調べれば明けても暮れても泣いている捨子同様の日本人がおるに違いない。その晩はホテルへ泊つた。翌朝ホテルでは大太鼓を叩いて歓送の意を示してくれた。私はバチを借り盛岡の山車太鼓を叩いて返礼の意を示した。それから北陵を見学し帰途に着いた。旅行は楽しかった。数人の中国人通訳とたどしくとも話の出来たのは特に楽しかった。私は今後も中国語を学ぼうと思つた。天津で買った二十万円のじゅうたん

も無事に届いた。南京虫、蚊、蠅と泥棒のいない生れ変わった中国、日中戦争で迷惑をかけたことを詫び永遠に友好でありますよう努力しますと心に誓った。

旅行から帰った翌日だった。県南へ中国から帰った残留孤児が日本語が解らず、悶々の日を送り将来の不安に耐えられず井戸へ飛び込んで入水したことが新聞記事になった。それを機会に日本へ帰る中国残留孤児を救えと立ち上った人々が、中国帰国者通訳奉仕会を作り県の援護課の引揚業務に協力することになったとの新聞記事を読み私も協力させて下さいと援護課へ駆け込んだ、課長は喜んで会長に報告し会員にしてくれた。以来十数年中国語を学びながら十世帯の帰国者の自立指導を担当したが、老いるに従い学んでも頭に入らず忘れがちなので三年前北京の迪電学院へ中国語を学ぶため留学することになった。元華北交通社員愛媛の松本氏と長岡市の米岡氏を華北交通の機関紙で知り、打合せの上、大阪港で鑑真号に乗り上海經由北京へ飛んだ。それから三か月の予定で学習を始めたが、松本氏も米岡氏も上級程度であり、私は中級程度にも

及ばなかった。講師は日本語を知らず、私は中国語が分らず、納得のいかない点が多く苦労だった。六月初め私は単身ハルビンへ旅行に出掛けた。五十年前の心の古里を見直して見たいと思った。列車は十七日間もかかってハルビンへ着いた。この駅は明治の元勲伊藤博文が暗殺された所であった。ハルピンは中国北方の文化都市だと思っていたが、何となく印象が下落しているような気がする。

私は先ず国際ホテルへ行って一泊の申し込みと明日午後発北京行の飛行機の切符を頼んだ。受付係は電話で連絡していたが売切れてない。明後日のはあるという。困ってしまった。明日夕方帰るからと説明して出てきたのに帰れないとは大変だ。私は駅へ走った。

しかし切符を買う客が延々と並んでいて、何時になったら買えるものか見当もつかない。

再び外へ出てタクシーを呼び飛行機の切符売り場へ走った。すると切符はすぐ買えたのである。ホテルの切符売切れとは、更に一泊させようとしたか、チップをねだる手段だと思った。しかし切符は以外に高かつ

た。北京を發つ時、友人から余分の金は持たぬ方が良
いと言われ、予想費用を計算してきたのにこれでは觀
光どころではない。私は一旦ホテルへ帰り、宿泊料を
前払いして、それから觀光を考え運転手に説明してい
るところへ一人の女性が車の中へ入ってきて言った。

私は通訳になるため日本語の勉強をしています。お金
を欲しくて来たのではありません。車中で日本語を学
びながら案内して上げたいのですと云った。

私は了解し一旦ホテルへ帰って、それから觀光の計
画をたてるからと言った。彼女はそれを運転手に伝え
た。しかし運転手はそれを聞こえぬかのようにスピー
ドを上げる。方向は反対方向のようだ。暫くして通訳
は言つた。

「この車は反対の方へ走っています。」もう駄目だ。
最初に私が彼に言つたのは香坊の旧部隊、忠靈塔、志
士の碑、そして毒瓦斯部隊と言つたのに彼は七一三部
隊入口へ私を降ろした。関東軍が我が部隊の隣村の平
坊で國際法を犯し、毒ガスを作り中国人を使い人体実
験をしていたとは。私は胸苦しくなつて急いで帰途に

着いた。私は金はない、北京へ着いたら送金すると名
刺に金二百元の借金也を書いて彼を帰した。

夜八時頃になつて電話のベルが鳴つた。

受話機を取ると女の声で「私は日本人です。今日あ
なたが中国人運転手にだまされたことを聞き我慢出来
ず助けに來ました。すぐ行きます」と行つて電話を切
つた。三分ほどしてドアをノックし走るように入つて
來た女性は、今日の通訳を連れて來た。そして「私は
日本人田中マリ子、日本語の先生です。今日案内した
のは生徒の沈篠英です。私は中村さんが運転手に騙さ
れたことを聞きました。タクシーの運転手は公務員で
す。あなたへ要求した料金は普通の四倍に相当します。
もし警察へ知られれば彼は処罰されます。私は彼を知
つていますので案内し飛行場まで送つて上げます。お
金のことは一切心配しないで下さい」と言い終わると
彼女は身の上話を始めた。「私は四歳の時、父母に連
れられ新京へ來ました。父は軍人でした。二年後北支
事變勃發するや直ちに現地へ急行し、母は四か月後、
私を満軍將校夫妻にあずけ「すぐ帰るからね」と言つ

て日本へ行ったまま帰らず、戦争は拡大し不利となり満州に風雲急を告げる頃、養父母は私を中国人夫婦に預け消えて行きました。私は二度目の養父母に育てられました。文化大革命時代は苦しい目に遭いましたが、後日名誉は快復し中国人と結婚し、二女一男に恵まれました。

しかし父母を恋うる心の消えることはありません。公務員を定年で退職した夫は年金で、私は公務員でしたが定年のとき年金を一時金で頂き、その金で東京へ行き日本人であることを証明して頂き、日本の戸籍謄本を頂いてきました。明日は私の謄本をお目にかけます」と言うやいなや落涙沛然はげそと慟哭なげした。

私も溢るる涙を抑えることは出来なかった。暫くして彼女は涙を拭き明朝八時に参ります、その前に運転手に会って来ますからと言ひ残して帰って行った。翌朝夜が明け八時になっても彼女は来ない。窓外はそうぞうしい。何事ならん、窓を開けて見ると学生や労働者がスクラムを組んで旗を掲げてワッショイ、ワッショイとジグザグ行進を繰り返している。マ

リ子さんは来ない。私は部屋を空けねばならず、ロビーへ出る。十時になって彼女は息を切らして沈篠英と共に走って来た。

「外は大変です、交通は混乱しこんなに遅くなりました。私は昨日運転手に会い全部精算して来ましたが安心して下さい。さあ出掛けましょう。」
と言って、二人は外へ出た。

日曜のせいか外は人人人でいっぱいだった。秋林百貨店の外国人専用の売り場へ行って私に「何が欲しいか」という私は何もいらないと言うと二人はそれぞれお土産を買ってくれた。

あちこち見て回って松花江へ行った。五十年前のこの河は豊富な水が悠々と流れていたが今日は水が少なく中洲が出来、それが乾いて風に吹かれ砂煙りとなって東の方へ流れてゆく。あちこち見て回り昼になった。マリ子さんの知り合いの食堂で昼食となった。その時マリ子さんは持ってきた戸籍謄本を示し確認して下さいというようであった。成程日本の東京の謄本に田中マリ子と書いてある。

キタエスカヤを見て回ったが五十年前の東洋のパリ等と言われた面影はない。

タクシーを拾い飛行場へ走った。車中でマリ子さんは童謡を歌い私もそれに和し大声で歌い合ったがマリ子さんの声は涙声となった。

子供の頃母と共に歌ったのを憶い出したのである。「中村さんは日本へ帰ったら童謡の本と東京と岩手の地図を送って下さい」と言った。ハルピン空港に着いたが三時間もおくられて飛び立った。北京空港が閉鎖されたからだという。北京へ着いたのは暗くなつてからだった。市内へ行く車はない、理由もわからず数十人の人が空港へ野宿となった。天安門広場の暴乱中だったのである。

執筆者の横顔

中村氏は、大正五年生れで、盛岡市出身である。

学術優秀で学校を卒業し、当時の東北地方は不景気の真最中であつたが、素直で正直な彼は人も羨む盛岡市での有力会社に採用され、恵まれものであつた。

友人、仲間の世話や面倒をみるが、人の上に立つ

ということなく会社内では仲間から信頼されて精勵していた。

やがて昭和十三年三月徴兵検査で甲種合格を言い渡され、ハルピン鉄道隊に入営の際は会社あげての晴れの入営を祝福されて渡満した。

根っからの勤勉な彼は、利発と努力で兵としては夢みるような下士官伍長に榮進して除隊にあつて郷土に華を咲かせた。

昭和十六年十二月望まれて、天津の華北交通機務段に就職して、中国人の先輩、同僚、後輩から、中村さん、中村さんと親交を結ばれながら勤務していた態度は、民族協和の信念で毎日の公務に精勵したあかしであり、この勤務ぶりが中国人から尊敬されて、のちに中村氏の幸運につながつた。

同二十年に悲しいかな、日本は敗戦、たちまち天津は混乱、外地における日本人の労苦は大同小異であるが、中村氏家族は天津における、中国軍と八路軍の戦争や現地中国人の日本人に対する暴動が惹起しての混乱、暴行、掠奪、殺傷事件まで、生き地獄そのものの

さ中に生活していつまでの生命かと思う日々の連続である。

しかし、この難局のさ中に、かつて機務段に勤務していた中国人から、「中村さん、あの時はお世話になりましたが、何か問題があったら、私にお手伝いさせて下さい」また、「中村さん、あなたは私を知らないだろうが、私は覚えています。住宅移動の際は、私の荷馬車で運ばせて下さい」また、「敗けた日本は大変でしょうから、中国に残って私と一緒に働きましょう」等々と言ってくれたのである。

中村氏は、中国で華北交通の機務段勤務中いかに中国人を理解して協力しあつたか、当時から日中友好運動を實踐していた人間である。

故郷、盛岡市に引き揚げるや、彼が渡満前勤務していた木津屋食品工業の池野社長から復職を懇望されて就職できた。五十余人の従業員を擁する会社の工場長として、社長並びに社員の皆さんに謝恩の気持で精勵した、引揚者の範を垂れた中村祐太郎氏である

会社を定年退職後は、岩手県庁から望まれて中日帰

国者通訳を委嘱され自立指導に奉仕会員として約十余人の方の更生に尽力し、慈父のごとく親われている。

中村氏は、この事業に生甲斐をもって精勵している。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

引揚者労苦記

南洋、台湾、蒙疆、残照

石川県 中山 隆

前編

南洋群島パラオ島より内蒙古へ

開教使となつて南洋群島パラオ島へ

木工徒弟養成所教官を委嘱される

私は篤信な父母のもとに育ち、在俗の出身ながら大谷大学に入学し、卒業の前年には出家得度して、浄土真宗の僧籍にはいり、法名を釈静照と称し、昭和十三年三月文学部哲学科―西洋哲学・西洋倫理学専攻―を